

無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題

堀 有喜衣

(労働政策研究・研修機構研究員)

本稿は、無業の若者が持つソーシャル・ネットワークの実態を事例に基づいて総合的に検討し、どのような支援が可能なのかについて議論した。第1に無業の若者のソーシャル・ネットワークは、「孤立型：家族以外の人間関係がほとんどない」「限定型：地元の同年齢で構成された人間関係に所属する」「拡大型：人間関係を広げていく志向が強い」に分類できるが、無業の若者においては「孤立型」「限定型」が多くを占めた。第2に、学校や公的機関、公的雇用は、無業の若者のソーシャル・ネットワークを補完する重要な役割を果たしていた。本稿から得られる示唆として、①学校を支援の起点として位置づけ、支援機関に結びつける役割を明確に与えていくこと②若者に対する公的雇用の拡充や、有給雇用に限られない活動を支援すること③社会活動と若者就業支援の両者を統合した、早期からの支援を行っていくこと、の3点が挙げられる。なおソーシャル・ネットワークと就業の問題は、無業の若者だけでなく、広く若者全体の問題と捉えていくことが肝要だと考えられる。

目次

- I 問題の所在と本稿の目的
- II 無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態
- III ソーシャル・ネットワークの特徴と支援
- IV おわりに

I 問題の所在と本稿の目的

本稿の目的は、無業の若者が持つソーシャル・ネットワークの実態と就業との関連について、事例に基づいて総合的に検討し、どのような支援が可能なのかについて議論することである。

若者が移行の危機に至る経緯や要因については、すでに5つのパターンが指摘されている(労働政策研究・研修機構 2004)。本稿が特に無業の若者のソーシャル・ネットワークに着目するのは、近年の研究によれば、無業の若者の大きな特徴は孤立した人間関係、すなわち狭いソーシャル・ネットワークにあることが指摘されているからである

(玄田・曲沼 2004)。しかしこれまでの研究は、若者が人間関係をうまくやっていく自信がないために無業になるというコミュニケーションの問題に力点が置かれており、無業の若者が持つソーシャル・ネットワークの機能と就業との関連については十分に触れられていない。

従来、日本におけるソーシャル・ネットワークに関する代表的な研究は、有業者が仕事を獲得する際に、ソーシャル・ネットワークがどのように機能するのかを明らかにする研究であった。例えば転職の場合、公的機関や民間の転職支援機関だけでなく、いわゆる「人脈」や「紹介」などが有効に働いていることはよく知られている。グラノベッターは、アメリカのホワイトカラー労働者において、「強い紐帯」(親しい友人や家族や親戚など)ではなく、「弱い紐帯」が転職を成功に導くことを明らかにしている(グラノベッター 1998)。これに対して日本のホワイトカラー労働者においては転職にあたって、「強い紐帯」が有利に働いて

いる（渡辺 1991）。若者の移行におけるソーシャル・ネットワークの機能については、日本労働研究機構が2000年に行った「若者のワークスタイル調査」が参考になる（日本労働研究機構 2001）。この調査によれば、ソーシャル・ネットワークの質は調査からはわからないものの、フリーターから正社員に移行する際に、ハローワークや就職情報誌などよりも、「親族や知人の紹介」を通じて仕事を見つけた割合が高いという知見が見いだされている。すなわちフリーターから正社員の移行においても、ソーシャル・ネットワークが有効に機能していることがうかがえる。

このように日本においても、ソーシャル・ネットワークはどのような種類のものであれ、就業にあたって有利に働いている。しかしながら蔡・守島（2002）は、利用するソーシャル・ネットワークの質によって転職がうまくいくか否かという点よりも、そもそも個人が置かれた立場によって転職経路が制約されている点を強調している。すなわち労働市場において不利な立場に置かれやすい女性や失業した中高年は、より望ましい結果をもたらす確率の高いソーシャル・ネットワークを持ち合わせていない。そのため転職の際には、誰でも利用できるフォーマルな経路を利用することになる。それゆえ特に労働市場において不利な立場の者におけるソーシャル・ネットワークと就業の関連について検討する際には、この2つの変数間の関連だけではなく、ソーシャル・ネットワークのありようそのものを含めた検討が必要とされる。

そこで本稿は第1の課題として、無業の若者のソーシャル・ネットワークが就業との関連においてどのような状況にあるのかを総合的に解明する。先行研究が示唆するように、不利な立場に置かれた者が転職に役立つソーシャル・ネットワークを持っていないとすれば、無業の若者も就業に役立つソーシャル・ネットワークを持っていないことが予想できる。そうだとすれば、不利な立場に置かれた女性や中高年にとっての転職の場合と同じように、個人的なソーシャル・ネットワークではない、開かれた支援が無業の若者にとって有効に働くことが求められる。したがって第2の課題は、就業にあたってソーシャル・ネットワークを補完

するような支援として何が働いているのか、働きうるのかを明らかにすることである。この点は、近年始まった公的な若者支援政策の有効性にもかかわっている。

しかしながら、無業の若者にとってのソーシャル・ネットワークの重要性は、ただ単に、ソーシャル・ネットワークによる就業機会の増加だけにあるのではない。ここでいう「ソーシャル・ネットワーク」とは、若者の判断の基準の拠りどころとなり、物理的な支援のみならず精神的な支援を受けられる社会的紐帯を意味している¹⁾。若者におけるソーシャル・ネットワークの重要性は、就業に直接結びつく契機となるだけでなく、若者に対するサポートとなり、若者の可能性を広げていくという意味で重要なのである。それゆえ本稿は、ソーシャル・ネットワークが若者をどのようにサポートしているのかという点を第3の課題とする。

II 無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態

本稿で用いるデータは、労働政策研究・研修機構が2003年から2004年にかけて行った調査に基づいており、すでに『移行の危機にある若者の実像——無業・フリーターの若者へのインタビュー調査（中間報告）』（労働政策研究報告書No. 6）にまとめられている（対象者51ケース・詳細は報告書参照²⁾）。このインタビュー調査は、現在移行の危機にある若者を主な対象としているため、どのようなソーシャル・ネットワークが無業の若者に対して有効であったのかを直接導くことはできない。けれども調査から若者のこれまでの軌跡をたどることができるため、彼らのソーシャル・ネットワークを動的に捉えることができるという利点を持つ。すなわち若者がどのようにソーシャル・ネットワークを形成し、そのソーシャル・ネットワークと就業がどのようにかかわってきたのかを把握することができる。またたとえ一時点であってもソーシャル・ネットワークによって無業から脱していたり、将来の見通しを持つようになったりする場合がある。こうした分析からは、支援の契機を見いだすことができる。

不安定な状態がソーシャル・ネットワークの縮

小の契機になりやすいことに着目すると、これらの調査記録は不安定な状態の開始時期ごとに分類される。その代表的なパターンをソーシャル・ネットワークとの関連で示したのが表1である。若者のソーシャル・ネットワークのタイプは、「孤立型：家族以外の人間関係がほとんどない」「限定型：地元の同年齢で構成された人間関係に所属する」「拡大型：人間関係が重層的で、人間関係を広げていく志向が強い」に分類される³⁾。

表1から明らかなことは2つある。第1に、若者はさまざまな契機から移行の危機に至ることが察せられる。中卒者や中退者の場合には不安定な就業状態に置かれることが多いが、たとえ高学歴で就業経験があっても、移行の危機に至ることもある。第2に、どの段階で学校を離れたかによって、ソーシャル・ネットワークのありようが異なることもうかがえる。早く学校を離れた場合には、特に男性は密度の濃い地元の濃い友人関係の中に生きている（「限定型」）。これに対して遅く学校を離れた若者のソーシャル・ネットワークは、学校を通じて形成されている。煩わしい人間関係を嫌がったり、友人を持たないなど、家族以外の人間関係が開かれていないケース（「孤立型」）が多く見られる。つぶさに見ていくと、学校を離れた時期によってソーシャル・ネットワークのタイプは異なるのだが、その範囲がかなり狭いのが両者の共通点である。

全体としては以上のような特徴が見いだせる。しかし表1からは、ソーシャル・ネットワークのありようが若者の就業に対してどのように働いているのかについてはわからない。それゆえ以下では事例に即して、無業の若者のソーシャル・ネットワークのありようと就業について総合的に検討を加える⁴⁾。

事例1 24歳男性 中卒正社員離職

現在日本における義務教育は中学までであり、大半の若者が高校へ進学する。しかし97%を超える高校進学率の中にあつて、進学しない若者もいる。彼らの人間関係は中学時代の交友関係のまま地元を超えた範囲に広がらず、将来の可能性を延ばすチャンスに特に恵まれにくい。

事例1は、地域の大人の紹介というソーシャル・ネットワークによる就業と、専門学校入学によって自分のソーシャル・ネットワークが広がったことが、アルバイトと無業を行き来していた彼に将来に対する見通しを持たせることになったケースである。

彼は、中学時地元の友達とのつきあいのためほとんど学校に通わず、高校進学も希望しなかった。父との喧嘩が元で、中学卒業後一人暮らしを始め、しかし1年で戻る。中学卒業時には学校の紹介で就職するが、上司に反発して半年で離職、その後アルバイトと無業との間を行ったり来たりの生活だった。その間、正社員の仕事で内定をもらったこともあったが、仕事の初日に起きられずにそのままになってしまったものや、アルバイトでも朝起きることができずに仕事を失ったりしたこともある。しかしこうした自分の状況に疑問を持つことはなかった。

19歳のときに地元の知り合いの大人の紹介で勤めはじめたアルバイトでは、真面目に勤めたため正社員に昇格したが、21歳のときに前から勉強したいと考えていた音楽の専門学校に入るために辞める。専門学校に入ったことがきっかけで、地元にとどまっていた狭い人間関係が広がり、自分も大きく変化したと語る。

「音楽をやり出して自分が変わったというのがありますし、だから、それで音楽はいまひとつあきらめつかないというか、居心地がいい場所になってしまったというか、また新たな自分を見つけるには音楽にのめり込まず見つけられへんのかなというのがありますし。

（変わったというのは？）

周り、人との接し方とか最低なマナーとか、人と出会って自分のことが一番わかったというのがありますね。人と話して自分自身がわかるという。（中学ぐらいの暮らしぶりとは）もう全然違いますね。親子の会話がものすごくできていますから、今。

（そのきっかけも音楽？）

そうですね。」

現在はアルバイトをしながら、音楽では生計を立てることは難しいことを認識しているが、将来

表1 事例の特徴とソーシャル・ネットワーク

	事例 1	事例 2	事例 3	事例 4	事例 5	事例 6	事例 7	事例 8	事例 9	事例 10	(参考)
地域	関西	首都圏	関西	東北	関西	首都圏	首都圏	首都圏	首都圏	首都圏	首都圏
学歴	中卒	中卒	高校中退	高卒	高卒	大学中退	専門学校卒	大卒	大卒	大卒	大卒
年齢	24 歳	22 歳	20 歳	20 歳	19 歳	24 歳	25 歳	27 歳	24 歳	26 歳	27 歳
性別	男性	男性	女性	女性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	女性
不安定な就業状況の開始時期	中卒正社員離職	不登校のため中卒→フリースクール	高校中退	高卒就職失敗	高卒正社員離職	大学中退	専門学校卒正社員離職	大卒就職失敗	大卒正社員離職	大卒正社員離職	大卒・派遣およびアルバイト
活動状態と就業経験	正社員離職後、アルバイトと無業の間を行ったり来たり。現在は公的機関の有期アルバイト	18 歳までフリースクールに通う。その後アルバイトを転々とする	中退後様々なアルバイト、17 歳でシングルマザー、現在は公的機関アルバイト	就職活動をするが受験に至らず、県のインターンシップの有期アルバイトから別のアルバイト	正社員離職後、無業となり、最近アルバイトをはじめる	大学中退後専門学校に入り直す。卒業後短期のアルバイト	正社員離職し、俳優の養成所などに通うが、母の看病をきっかけに非活動	大学時代の就職活動では営業を志し、併業を志し編集に絞って失敗。その後公務員離職。現在アルバイト	正社員離職し、職業訓練中	正社員離職し、無業ののち、求職中	就職活動はせず、卒業後海外でボランティア、戻ってから資格を取る傍ら派遣、資格の経験のためアルバイト
ソーシャル・ネットワークの特徴	地元に限られた人間関係	親戚がアルバイトを紹介	地元のブローカーの友達	普段一緒に遊ぶ友達はいない	友達と離れるのが嫌で離職	面倒な人間関係は嫌	直接会う友達はいない	高校時代は家と学校の往復であまり遊ぶ機会なし	親しい友達はいない	悩みを友達に相談しない	派遣先ではコミュニケーションがうまくいまいという点で評価される
支援の状態	音楽の専門学校・地域の大人・ハローワーク	若者支援機関	父の紹介	高校の先生・ハローワーク	高校の先生・アルバイト先の先輩	編集の専門学校の先生	ボランティアを断られ、専門学校入学を希望	若者支援機関	大学・TV で見た若者支援機関	家族のすすめで若者支援機関	友達の紹介で派遣会社登録
分類	限定型	孤立型	限定型	孤立型	限定型	孤立型	孤立型	孤立型	孤立型	孤立型	拡大型

音楽に関連する仕事に携わりたいと思っている。

若者支援機関で同じ悩みを持つ仲間を得たことから自信を持ち、就業に向かっている。

事例 2 22 歳男性 中卒後フリースクール

事例 2 は、中学から不登校になった。その後通ったフリースクールの仲間に刺激され、アルバイトをするが、店が倒産するなどのトラブルに遭い、無業になる。その後アルバイトを再開し、訪れた

彼は、中学 1 年生のときから学校に行かなくなり、家で小説を読むゲームをする閉じこもった生活になった。中 3 のときに、担任教師から薦められたフリースクールに通い始める。卒業時には担任教師から通信制高校を薦められたが、そのま

まフリースクールに通い続けた。17歳のときに、同じフリースクールでアルバイトをしていた人がいたことに刺激を受け、親戚から紹介されたアルバイトを経験する。その後2年間アルバイトとして小さな書店で働いたが店がつぶれてしまった。そのころ家の経済状態が悪くなり、フリースクールには行かなくなった。専門学校は経済的に難しかったため、資格があれば学歴がなくても働けるかと思い、独学で資格試験の勉強をしたが、親は就業を薦めたので辞めた。深夜のコンビニでマネージャーとしてアルバイトをするが、店の方針が変わってアルバイトに格下げになり、がっかりして辞め、半年間遊んでいた。その後コンビニのアルバイトを再開するかたわら、若者支援機関を訪れた。仕事を探しているという同じ立場の人とコミュニケーションをとれるのが楽しく、自信もついてきたため、正社員としての就職活動に向かおうとしている。

「ほかの人が就職活動について頑張っている姿を見ると、自分もやらなきゃなみたいな気分になるだろうし、自分の悩みやこういうことをしてきたとか、思いをしてきたとかというところをほかの人と話し合うことで、励みになっているみたいなどころがありますね。お互いに励まし合ってアドバイスをしたりとかというのもあるし、自分のことを話すことで気持ちが楽になるということもあるし、とにかくまず、同じ立場の人とコミュニケーションをとれるのが楽しいというのがあります。とにかくそこに初めて行ったときと今の自分がすごく変わっている実感がありますね。」

事例3 20歳女性 高校中退

事例3は高校中退をきっかけにアルバイトを転々とし、シングルマザーになった。その後公的機関でのアルバイトを通じて、働くことの難しさと楽しさに思いが至るようになり、遊んでいる無職の友達に引きずられずアルバイトを続けている。

事例3は、高校進学時に友達関係を広げようと、地元から離れた高校に進学した。高校の友達関係はうまくいっていたが、友達と喧嘩で殴り合いになり、停学にはならなかったが「だるくなって」中退した。高校中退後友達の家を転々とし、お金

のために短期のアルバイトを繰り返した。17歳のときに「まわりの子らが産んでるから産みたいみたいなノリがあって」、シングルマザーとなる。子供が2歳になったときに、父の紹介で子供の世話をする公的機関のアルバイトをはじめ、現在も継続している。現在の仕事内容は体力的には楽だが、子供の安全に気を遣ったり、組織の中での上下関係が難しいと感じており、礼儀が身についたと語っている。プータローや好き勝手に遊んでいる友達を見ると、アルバイトを辞めて遊ぶ生活に戻りたいと思うこともあるが、現在のアルバイトはあっているような気がするので続けていこうと思っている。

事例4 20歳女性 高卒就職失敗

事例4は真面目な高校生活を送ったが、地元の東北地区には思うような求人がなく、就職することができなかった。現在は希望の事務でアルバイトをしているが、人間関係は広がらず、普段遊ぶ友達は少ない。

彼女の高校を選ぶ際の基準は就職であった。高校進学後、成績もよく、真面目な学校生活を送り、就職活動をはじめ。先生に積極的に相談し、求人票だけではわからないような情報も得るなど努力をしているが、思うような事務の求人がなく、就職試験を受けるまでに至らなかった。高校卒業前に就職を決めることはできなかったが、県のインターンシップに合格し、有期のアルバイトではあるが事務の仕事に就いた。アルバイト期間中にハローワークを訪れ仕事を探したが、なかなか事務の仕事は見つけられなかったという。その契約期間がきたあと、高校の教員の口添えで、インターンシップ先の職場に次の事務のアルバイトを紹介してもらうことができた。現在のアルバイトは午後早く終わるが、友達は正社員になったり、あるいは進学して遠方に行ってしまったため、普段よく遊ぶような友達は少ない。仕事が終わると家に戻って、姪の相手をしていることが多いという。正社員を希望しているが、先は見えていない。学校を離れたことを契機に、ソーシャル・ネットワークが縮小し、拡大のきっかけは見えない。

事例5 19歳男性 高卒正社員離職

事例5は、自分が所属するソーシャル・ネットワークから離れることを拒んで就業から遠ざかっており、ソーシャル・ネットワークが若者の行動範囲を制約している例である。地元の友達に限られたソーシャル・ネットワークの中で、唯一外の世界の情報の提供源となっているのが高校である。かつて若者の重要なソーシャル・ネットワークとして機能していた学校のサポートはかなり弱まっていると言われているが（耳塚ほか 2000）、まだ一定の影響力を維持している。

事例5は、「勉強よりも手に職」と考え、中学卒業時には専門学校か高校か迷ったが、みんなが高校に行くので高校に進学した。高校は適当に選んだが、保護者が厳しかったため真面目に通った。高校2年生のときに父が倒れ厳しく言う人がいなくなり、「なんか行くのがしんどかった」ため、遅刻が多くなった。卒業時に希望であった調理師の仕事に学校を通じて就くが、地元から離れて住み込むように言われ、友達と離れるのが嫌で離職した。

辞めた後はしばらくアルバイトもせず、昼過ぎまで寝てパチンコをしたり友達と遊んでいたが、親に毎日のように仕事をするように言われて現在は魚をさばくアルバイトをしている。離職してしまっただが、調理師になりたいという夢はまだ持っており、高校の教員を通じて調理師についての情報を入手するなど、離職後も学校が支援機関として機能していることがうかがえる。またアルバイト先の大人のアドバイスも彼を励ましている。

「今からでも調理師の免許を取りたいなと思ってるんですよ。だから今、どうしたら取れるかなと結構今、聞いたりしてるんですよ。専門学校行くのもいいんやけどお金がかかるじゃないですか。で、ちゃんとした、ちゃんとしたというか、そういう魚さばいたりとかやってたら、何年かやったら上からのもらえるみたいなんですよ。試験を受けるための。それでくれたらもうそれで頑張らなあかんし。

（その情報はだれから？）

学校の先生です。進路の先生とか、バイト先の上の人とか。

（ご自身で学校に行ったんですか？）

はい。相談のためですね。仕事を前のとき、やめるというときに1回聞いたんですよ。こうこう、こういう理由でやめようと思ってるんやけどみたいな。1回聞いたことがあるんです。親に言われへん部分もあるじゃないですか。親には言われへんけど、違う人だったら言えるみたいな、それでちょっと楽になりました。

（結構、頼りになる存在ではある？）

そうですね。結構。」

事例6 24歳男性 大学中退

事例6は、人間関係や将来について深く考えることを避け、推薦で大学に進学したが大学を中退した。その後編集者になりたいという希望を持ち、専門学校に進学したが、まだ就職する自信は持てなかった。その後面接を受け続けていくなかで、自分のコミュニケーション能力に問題を感じて変わろうと努力し、仕事に就くことができた。

事例6は、大学に入るまで特に問題なく、流れにのってやってきたという。面倒な人間関係や、将来について深く考えることを避けてきた。学力的に大学に行けるとは思っておらず、自分が文系か理系かもよくわかっていなかったが、先生に大学への推薦を紹介され、推薦でいける工学部に進学した。もし進学していなかったら何もしていなかったと言う。この若者は工学部に進学後、専門科目が増えてきた2年生から大学には行くが、授業には出なくなった。単位が足りなくなり自主退学のかたちをとった。

中退後間もなく、編集者になりたいと考え、専門学校への進学を決める。専門学校卒業時の就職活動には、会社の人間関係に入っていき自信がなく、「大変になる前に引いちゃった」という。しかし卒業後もゆっくりとではあるが会社訪問を続けており、面接の際に、「そのときに決定的に、『あつ、やる気のほうが重要なんだな』という、何をやるかというよりもきちっと社会に出て働くということを理解しているということ、それから、例えば人間関係がどうかということを考えている場合じゃなく、きちっとやれるというコミュニケーションのスキルや何かを持っていないということ

がわかって」、能動的に動こうとするようになった。その後専門学校時代の講師の紹介でいろいろな人に会ったり、コミュニケーションの取り方を学びつつ、修業的な仕事をしながら短期のアルバイトをしている。インタビュー後、編集者への一歩を踏み出したという。

事例7 25歳男性 専門学校卒正社員離職

無業になるのは、就業経験のない若者だけではない。一度正社員として就職しながらも、無業ないしは無業に近い状態に陥る若者もいる。事例7は、ソーシャル・ネットワークを拡大するためにさまざまな試みをしているが、その試みは必ずしも受け入れられていない。

事例7は専門学校卒業後に、自分の専門とは全く関係のない企業に就職したが、職場で上司の暴力があり、ノイローゼようになって離職した。もともと友達が多いほうではなかったが、離職した後、ひきこもりになることを心配した母親から薦められ、俳優の養成所に通ったり、インターネットで知り合った若者とお遍路さんのように一緒に長い距離を歩くなど、無業ながらも活動的だった。その後もホームヘルパーの資格を取るなど活動的であったが、家族の看護をきっかけとして、家族以外との社会的つながりを失った。

携帯やネットでは友達がいるが、直接会う友達は「あまりいない、というか全然いない」ため、「寂しさを紛らわすところ。一人じゃない、少なくとも」という場所を求めてボランティアに参加していたが、ボランティア先から断られ、非活動的な状態にある。現在は資格を取得するために学校に通おうとしており、学校を通じて人間関係の再構築をはかろうとしている。事例7にとっては、学校は自分の閉塞感を打破するための突破口と認識されている。

事例8 27歳男性 大卒就職失敗後就職・離職

事例8は、熱心に就職活動をしたが大卒時の就職に失敗した。卒業後、支援機関の相談の中で公務員に方向転換をして成功したが、すぐに離職してしまい、別の公務員試験を受けたが失敗して現在はアルバイトをしている。

事例8は、中学時代に母を亡くしたことをきっかけに、遠く離れた高校に通いながら、母の代わりに家事を担うようになった。そのため高校時代は家と学校の往復だけで友達と遊ぶ時間もあまりない生活を送った。大学受験の結果は不本意だったが、転部して希望の学部で学ぶことができ、就職活動に臨んだ。就職活動に際しては、営業はいやだということで、営業がない業種だと考えた出版を目指した。面接がとても苦手で「何か針のむしろなんでものじゃないですね。地獄の中へ、こんな太い針の上を歩くような罰があるのかというんじゃないですけど、あんなようなものですね」と感じながら延べ80社くらい受け続けたものの、内定を得られなかった。就職活動を振り返り、自己分析がうまくいかないまま就職活動を続け、消耗したと語る。相談相手もいなかった。

就職を断念した後訪れた若者支援機関に相談するなかで、公務員に挑戦しようという気持ちになっていった。

「それでまずそこで絶対営業は嫌だった、そこはかたくなに嫌だった、譲れなかった。それで何やろうかな。そこで、あれこれ相談していくわけです。私が行ったのが、〇〇（若者移行支援機関）とか、そこに行って、相談員の方としゃべっているうちに、ああ、公務員というのいいな、そこで初めて公務員が出てきたんです。」

志望を公務員に切り替え、試験に受かっていったん就職したが、上司とうまくいかずすぐに離職した。その後別の公務員試験は面接でうまくいかず失敗したが、正社員登用の道があるアルバイトをはじめ、このままアルバイトから正社員をめざすか、公務員試験を受け直すかを考えている。

事例9 24歳男性 大卒正社員離職

事例9は一度就職したが離職し、現在は職業訓練中であるが、親しい友達がいなことに悩んでいる。親しい友達ができれば、仕事もうまくいくのではないかと感じている。

事例9は、小学生の頃からいじめられた経験があり人間関係に悩んでいた。高校進学後も病気で学校を休んだ時期があり、心を閉ざすようになった。高校はやっとのことで卒業し、浪人を経て大

学に進学した。

進学先は工学部であり、アルバイトもするなど活動的であった。はじめは慣れるのが大変だったが、大学後半になってから友達とも話すようになっていったという。就職には真面目に取り組み、大学の支援も積極的に利用した。卒業直前まで就職活動がんばりやっとな仕事を果たしたが、仕事になじめず、半ば首になるようなかたちで離職し、現在は職業訓練中である。

就業意欲は高いが、今の悩みは親しい友達がいないことだと述べており、友人関係がうまくいけば他のこともうまくいくのではないかと語る。彼はソーシャル・ネットワークにおけるつまづきが、就業への障害になっていると感じているのである。

「(今、ふだん遊んでいる友達というのは、どういったつながりのお友達が多いんですか?)」

いや、はっきり言って今いないです。今の悩みとしまして、やっぱりプライベートでいわゆるそういう人たちがいないということですね。それが今一番の悩みかもしれないですね。ほんとにそれが何とかなれば少しよくなって、ほかのことも円滑にやれると思うんですけど。」

事例 10 26 歳男性 大卒正社員離職

事例 10 は離職をきっかけで自信を失い、ソーシャル・ネットワークを縮小していったが、若者支援機関で自尊心を取り戻し、再び活動を始めている。

事例 10 は、特に問題なく大学に進学し、大学卒業後は就職するという強い気持ちを持って早めに就職活動をスタートした。その努力が報われ、何とか在学中に内定を得ることができた。就職先でがんばって働いたが、早期に離職を余儀なくされた。自発的離職という形をとっているが、解雇に近かったと語っている。離職直後はこのあとまた仕事につけるのかなど不安でいっぱい、

「ほかの仕事にももうつけないんじゃないかって思い始めちゃったりとか。こんな仕事もできないんじゃないかっていうのがひとつあって、どこに行ってもだめなんじゃないかとか考えだしちゃったりとか。結構、努力もしたんだけどという気持ちがあったんで」

とても辛かったという。

悩んでいる最中には、友達にも接触する気にはならなかったが、立ち寄った若者支援機関でさまざまな人に出会い、自分の経験を話していくうちに自分の中で辛い経験の整理が付きはじめた。

「ここ(筆者注:若者支援機関)に来て、今まで仕事をやってきた、自分がどんな仕事をやってきたのかとか話すようになってきたりとか、話しやすい人がたくさんできたんですね。その中で、何となく自分の中で踏ん切りがついたというか、だんだん整理できるようになって、自分のことも話せるようになったし、だんだん前向きになってきたんですね。特に人と話すことってあまりしてなかったんで。

(あまりお友達とかにも会わずに?)

そうですね。会ってもあまり気が晴れないってうか。話すことが、結構、悩んでるときには重要だっていうのが、ここに来てようやく気づき始めたんですね。将来像が何となくぼやっと出てきたりとか。自分の中にあったものがだんだん見えてくるんですね。別にここで職業の相談を受けたからとか、そういうことではなくて、自分の中でいろんなものが整理できた。結果として、また新しい発見というか意欲が見えてきたというのはあったんですけどね、ここに来て。」

事例 10 は、家族だけにとどまっていたソーシャル・ネットワークが、支援機関で知り合った若者同士のソーシャル・ネットワークに拡大していった。在学中の就職活動は学校を頼らなかったが、離職後、出身大学の就職部を尋ね相談するなど、さらにソーシャル・ネットワークの範囲を広げつつある。

Ⅲ ソーシャル・ネットワークの特徴と支援

代表的な 10 ケースの事例から、無業の若者のソーシャル・ネットワークには以下のような特徴が見いだされた。

1 ソーシャル・ネットワークの 3 類型

無業の若者のソーシャル・ネットワークには、

以下のような3つの代表的パターンが見いだされる。高学歴者に多く人間関係が薄い「孤立型」、地元の濃い人間関係に安住する「限定型」、人間関係を広げていく志向が強い「拡大型」であり、無業の若者の多くを占めるのは「孤立型」および「限定型」であった⁵⁾。「限定型」ソーシャル・ネットワークは、若者を精神的にサポートすると同時に制約する側面も見られた。事例5は、地元の友達と離れたくないために、就業継続を拒否している⁶⁾。あるいは事例3に見られるように、「みんな(まわりの子)がやっている」ということが選択の際の重要な判断基準となって移行の危機に至るといふ例も見られている⁷⁾。

2 ソーシャル・ネットワーク拡大のための補完機能

「孤立型」および「限定型」の限定されたソーシャル・ネットワークを、学校・公的雇用・公的機関などのフォーマルな支援が補っていることが浮かび上がってきた。また若者をよく知る大人の役割も有効であった。

①学校の支援

就業経験の少ない若者のソーシャル・ネットワークにおいては、学校の支援は大きな影響力を持っている。若者の移行支援として学校の役割が大きいがしばしば指摘されるが、この場合には、スキルや資格を与えたり、就職斡旋をするというような就業に直接結びつく点が指摘されることが多い。しかし学校は、所属する者にソーシャル・ネットワークを広げる機会を与える機関でもある。学校を通じて得られる友達は、地元の友達とは異なり、異なる価値観にふれる機会を与えてくれるため、若者の世界を広げる可能性をもたらしてくれる(事例1)⁸⁾。教員のアドバイスは、家族以外に情報源となる大人を持たない若者にとっては大きな励ましとなる(事例5, 事例6)。

②公的雇用

公的な有期雇用の創出は、雇用終了後の就職率の向上に役立っていないとして中止する自治体も見られるが、本稿の事例においては有効であった。事例3においては、お金のためだけにアルバイトを渡り歩いていた若者が、ある程度の裁量と責任

のある仕事を与えられ、これまでの唯一の選択基準だった遊んでいる友達に引きずられず、仕事について思いを巡らせていくような機会を与えていた。事例4においては、雇用の機会に恵まれにくい地域の若者が無業となることを防ぎ、希望の仕事を提供していた。これらはほとんどが継続的な雇用ではないが、特に雇用情勢が厳しい地域において、アルバイトであっても仕事の質が考慮された、若者の可能性と能力を伸ばしていけるような機会となることが期待される。

③公的機関

公的機関において擬似的にソーシャル・ネットワークを作り出すということは、就業支援としても評価できる。同じような悩みを持っている若者との出会いの場、話し合いの場を得ることは若者を勇気づけており、自信を得た若者が就業に踏み出す例も見られた(事例2, 事例10)。また相談相手のいない「孤立型」の若者が公的機関で相談をすることによって仕事の選択肢が広がり、就業へ結びつく例も見られた(事例8)⁹⁾。

より詳しくみると、若者支援機関は高学歴の若者に利用される割合が高かった(事例8, 事例9, 事例10)。実際に支援機関に対する調査においても、公的な若者支援機関は高学歴利用者が多いという知見が見られている(小杉・堀 2003)。しかしハローワークは、早く学校を離れた若者にも利用されていた。これは高学歴利用者に「孤立型」が多く、「居場所」を探していることが多いため、「居場所」を提供する若者支援機関に集まりやすいのに対して、学歴の低い者に多い「限定型」の若者は、狭いが安定した人間関係を持っているため、「居場所」よりも直接収入を得られる就業を求めるとあるためではないかと推察される。

④紹介によるアルバイト就業

地元の大人の紹介(事例1)・家族の紹介(事例3)・親戚の紹介(事例2)など、知り合いの紹介によるアルバイト就業は、その若者を知っている人が雇用主との接点に立ってジョブマッチングを行っているためか、若者に働くことに対するプラスのイメージを与える機会となっていた。誰にでも開かれている支援ではないが、若者をよく知る大人による仕事の紹介は有効であった。

3 ソーシャル・ネットワークの縮小の契機

ソーシャル・ネットワークの縮小はさまざまなきっかけで起こることも明らかになった。学校や職場を離れた時だけではなく、親の看病や身内の死、不安定な精神状態もソーシャル・ネットワークを縮小させる。父が倒れたことをきっかけに家族のサポートがなくなったため、真面目に学校に行かなくなったり(事例5)、母が亡くなったために家事を担い、家と学校の往復で友達と遊ぶ時間がなかった(事例8)などのケースも見られる¹⁰⁾。こうしたケースに対する支援は現在のところ困難な状況にある。またいったんソーシャル・ネットワークが縮小した後に再び拡大するのは困難であり、事例7のように、本人が進んで「居場所」を探して活動しても受け入れられないケースも見られる。ソーシャル・ネットワークが縮小しないような予防的な働きかけが必要だろう。

IV おわりに

以上本稿は、無業の若者のソーシャル・ネットワークについて総合的に検討してきた。本稿は限られた事例分析であり、それゆえ一般化するには限界もある。しかし以下のような二つの知見を見いだすことができる。

第1に、無業の若者のソーシャル・ネットワークは、どの段階で学校を離れたのか、また性別によってもそのタイプが異なっている。早く学校を離れた男性は地元の狭く強い「限定型」ソーシャル・ネットワークに生きているが、雇用情勢の厳しい地域の女性のソーシャル・ネットワークは「孤立型」になっている。学校を離れるのが遅い男性の場合には、家族以外にほとんどソーシャル・ネットワークを持たない、典型的な「孤立型」が多い。

第2に、無業の若者のソーシャル・ネットワークにおいて、学校や公的機関、公的雇用はこれを補完する重要な役割を果たしていた。

「限定型」においてはソーシャル・ネットワークによってサポートされる一方、行動が制約されていたが、公的雇用や学校は、彼らが普段接する

ことのない情報や経験を提供しており、彼らの可能性や将来に対する見通しを広げていた。例えば、公的機関の仕事に就くことによる異質のソーシャル・ネットワークの拡大が、地元の友達の価値観に引きずられず仕事を継続させている例が見られた。また学校への進学は必ずしも就業には結びつかないと言われるが、ソーシャル・ネットワークの拡大には寄与しており、異なるタイプの若者と交流し、ソーシャル・ネットワークが拡大することによって視野が広がっている面も見られた。また学校を早く離れた若者にとって、学校の教員は情報を提供し、相談相手にもなっていた。

「孤立型」の若者にとって、擬似的なソーシャル・ネットワークづくりを公的機関が支援していくことは有効であった。近年、若者支援政策の一環として、公的機関が若者に対して「居場所」を提供する動きが見られる。本稿の事例では、公的機関の支援者がサポート役になるだけでなく、その場で知り合った若者同士が精神的にサポートしあうソーシャル・ネットワークが形成され、就業へ踏み出す姿が見られた。こうした「居場所」提供タイプの支援の場合、就業に向かえる若者については、公的機関の支援者が若者を就業へ押し出す役目を果たすことが求められる(例えば工藤2004)。

以上の知見から次のような示唆を得られる。

第1に、移行の出発点としての学校の活用である。学校の支援はかつてと比べて弱まっているが、地域によってはいまだ若者に対する影響力がある。学校を支援の起点として位置づけ、支援機関に結びつける役割を明確に与えていくことが考えられる。

第2に、若者に対する公的雇用には無視できない効果がある。批判も見られるが、本稿の事例においては、若者が将来を考える期間を与えたり、雇用情勢の厳しい地域では無業を防ぎ、希望の仕事の経験を与える機会となっていた。今後若者支援としては、有給雇用ではない、訓練・ボランティア的な活動を行ったり、ソーシャル・サービスなどによって若者のための雇用を創出する移行的労働市場政策も考えられる。有給雇用に限られない活動に広げていくことも考えられてよい。

第3に、統合的支援の必要性である。これまで若者のソーシャル・ネットワークづくりを支援するのは社会教育施設における社会活動の役割とされ、若者就業支援とはほとんどかかわっていなかった。しかしソーシャル・ネットワークを総合的に検討した本稿の知見によれば、無業の若者が就業に向かうにあたって、ソーシャル・ネットワークの形成が有効に働いているケースが多く見られた。若者が自らソーシャル・ネットワークを作る力を身につけるには、就業に直面する以前からの働きかけが必要であり、かつ長期的にはこうした働きかけが就業支援につながっていくことがうかがえる。将来的には両者を統合した、早期からの支援が求められるようになるだろう。

なお多くの若者論は、若者一般のソーシャル・ネットワークが狭くなっていることを指摘している。ソーシャル・ネットワークと就業の問題は、広く若者全体の問題と捉えていくことが肝要であると思われる。

- 1) 沖田はソーシャル・ネットワークを「多くの人々が関連しあいながら網目状に存在する、若者の日々の生活の場／生活世界」と定義している。
- 2) 支援機関や教員を通じて調査対象者にご協力いただいたケースが多いため、無業の若者の中でも現在の支援にのってきやすい若者が含まれている。支援にのってこない若者は別稿にゆずる。
- 3) グラノベッターの整理によれば、ソーシャル・ネットワークを類型化し、就業との関連を検討する研究は複数存在する。例えばカーソンは、失業者のネットワークを「孤立型」「限定(制限)型」「拡大型」に分類し、「拡大型」「限定型」「孤立型」の順で再び雇用される確率が低くなることを見いだしているという(グラノベッター 1998)。本稿の類型名はカーソンを参考しているが、異なる意味で用いている。
- 4) 括弧内は対象者の語りであり、聞き手の質問はさらにクエスチョンマークを加えてある。
- 5) 本稿では紙面の制約のために「拡大型」に関する議論は行わないが、参考として表1に事例をまとめている。「拡大型」は、ソーシャル・ネットワークという点での公的な働きかけがなくても、自分で積極的にソーシャル・ネットワークをつくりだすことができるタイプである。なお女性の場合には家事手伝いの形態をとって問題が隠されている可能性があり、

検討が必要である。

- 6) インタビュー対象者に複数見られた。
- 7) 沖田は「もう一つの選択のためのソーシャル・ネットワークづくり」を提案している。
- 8) 同性の同級生5人の場合、「本人も含めて非常に似かよった社会の中で、似かよった体験をして生きており、この友人ネットワークは、非常に狭い生活世界の情報しかもたらさ」ない(安田 1997; 64頁)。
- 9) 限られた情報しか得られない「限定型」の若者においても有効であろう。
- 10) 本稿のケース51人のうち、8人が親の離婚を経験、再婚3人、死別7人と、不安定な家族状況にあった若者が多い。詳しくは労働政策研究・研修機構(2004)参照。経済的問題であれば奨学金政策などの支援が考えられるが、家族を失ったことによる精神的サポートについて、行政による支援は現在のところ困難である。

参考文献

- 玄田有史・曲沼美恵(2004)『ニート——フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎。
- グラノベッター(渡辺深訳)(1998)『転職——ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房。
- 小杉礼子・堀有喜衣(2003)『学校から職業への移行を支援する諸機関へのヒアリング調査結果——日本におけるNEET問題の所在と対応』JIL ディスカッションペーパー。
- 工藤啓(2004)『若年就労支援現場レポート No. 2 (unpublished report)』。
- 耳塚寛明ほか(2000)『高卒無業者の教育社会学的研究』文部省科学研究費報告書。
- 日本労働研究機構(2001)『大都市の若者の就業行動と意識』調査研究報告書 No. 146。
- 沖田敏恵(2004)「ソーシャル・ネットワークと移行」労働政策研究・研修機構『移行の危機にある若者の実像——無業・フリーターの若者へのインタビュー調査(中間報告)』労働政策研究報告書 No. 6。
- 労働政策研究・研修機構(2004)『移行の危機にある若者の実像——無業・フリーターの若者へのインタビュー調査(中間報告)』労働政策研究報告書 No. 6。
- 蔡芒錫・守島基博(2002)「転職支援システムとしての公的職業紹介機能」『日本労働研究雑誌』No. 506。
- 渡辺深(1991)「転職——転職結果に及ぼすネットワークの効果」『社会学評論』42巻1号。
- 安田雪(1997)『ネットワーク分析——何が行為を決定するか』新曜社。

ほり・ゆきえ 労働政策研究・研修機構研究員。主な著作に『(仮題)フリーターとニート』(共著 勁草書房, 近刊)。教育社会学専攻。